

最優秀賞は田辺聖子賞のページ(22ページ)に掲載しています。

## 【優秀賞】

## 反比例と青春

宮島 梧子(東京都 女子学院高等学校 1年生)

ハツのことを分かつとるほど、私自身のことから分かつとる。普段より一本早い電車に乗ることができた朝の私は、ハツをどこからやましげな目で見てゐるのに、部活に疲れたその日の帰り道には、どうしようもなくハツを軽蔑したくて踏ん張つてゐる私がある。同じページを何度読み返しても、私自身が二度同じ気持ちを抱くことはできない。客観的にハツに向き合おうと努めた私を、ハツは全力で拒んできた。

主人公のハツは、頑なに「独り」を守り続ける一方、「独り」であることに日々打ちひしがれ、やり場のない感情を募らせる高校一年生だ。彼女は、クラスの中に形成されたグループに入り、「仲間意識」を持って友達と付き合うことを「他人と飽和」すること、つまりグループの中に溶け本当の自分を封じることだと定義し、人のいい友人からの誘いも毎回拒否するが、誰かに認めてもらいたいという欲求も持ち合わせてゐる。ハツのクラスには、学校生活活を「独り」で送る男子も一人ゐる。しかし、にな川という名の

彼は、ファッションモデル・オリチャンに夢中で、「独り」であることを意識すらしていない。二人はクラスメートから、同じ「余り者」にカテゴライズされているが、「余り者」としての自分をもつとるに捉えてゐるのか、という点には大きな違いがある。

ハツ、にな川、彼らのクラスメート、そして私。それぞれに焦点を当てて考え続け、気が付いた。日々の中に「反比例」を抱えているではないか。

ハツの心は、自身の孤独さを強く自覚し、それから抜け出したと思つとるほど、他人を否定する言葉で埋め尽くされる。そうして、周囲との間に存在する溝を、自ら深くしてしまう。にな川は、オリチャンとの間の物理的な距離が縮まるほど、オリチャンの存在を遠くに感じた。ライブ後のオリチャンの待ち加わり、安全柵の向こうに足を踏み入れた時、彼と人気モデルの間の距離を表すx軸の値は限りなくゼロに近かつたはずだが、にな川が感じたオリチャンとの間の距離yは、彼の頭にあつたグラフには収まらないような、高い値だつたのだ。そしてまた、自分の殻を破つてオリチャンに近づくことに挑んだ彼の背中を、「愛しさよりも、もつと強い気持ちで」蹴りたくなるハツ。ハツをがんにがらめにしてゐる「心にからみつく黒い筋」とは、幾多の反比例がぶつかり合ひ、連鎖したものでないか。

反比例を抱えて苦しかつた思ひ出は、ハツと同じ高校一年生である私にもある。当時は思考を巡らす余裕もなく、慌ただしい感情に支配され、はつと我に返つた時にはすでに解放されていたよつとるに思つとる。が、今思えば、当時の私は自ら反比例に追い詰められ、もがいてゐたのだ。

期限が差し迫つてゐる上に重要な仕事を任せられ、私は大いに張り切つてゐた。責任をもつて与えられた仕事をやり遂げ、周囲の

信頼を得たいという一心で、無理のある計画を立てた。見るからに厳しそうなスケジュールは、私を奮い立たせるからだ。しかし、期限が近付くにつれ、自分一人の手には負えない仕事であったことに気付かされ、次第に自分以外の誰かの助けが必要だと感じ始めた。私の力量ではやり遂げられそうにない、早く誰かの力を借りなければ。そんな焦りはむくむくと大きくなるばかりだったのにもかかわらず、様々な理由をつけては人を頼るチャンスを遠ざけていた。結局、誰にも助けを求められないまま期限を迎えた。

この時の私の「反比例」は、助けが必要だと思えば思うほど、他者をより遠ざけてしまうものだった。誰かに信頼を置き共同で仕事を進めることを自ら避け、「独り」で追い詰められることを選びとってしまった私の「反比例」体験には、ハツと通じるものがある。

時を重ねれば、ハツが抱えている反比例も、私が自覚なしに抱えているかもしれない反比例も、少しずつほどけてゆくのだろうか。私は、きつとほどけてゆくとと思う。そう思えるという点では、反比例をほどいてくれる誰かを待つばかりで自分の殻を破れずにいるハツよりも、私は先を歩んでいるかもしれない。

私が、反比例を抱えることなく毎日生きられる時はいつ訪れるだろうか。その時が訪れるまでの道のりには、多くの反比例が待ち受けているはずだ。今までの私なら、反比例に苦しんでいた自分に気が付くのは、その反比例から放たれた後だっただろう。しかし、今の私にはハツという伴走者がいる。私が一人で「黒い筋」に絡まっている時、彼女はきつと私の内に現れ、私にはない感覚を用いて、時に私を悩ませながら、一緒に「反比例」を探してくる。だから私は、前を向いて明日に挑めばよいのだ。

書名…蹴りたい背中  
著者…綿矢りさ